
秘密の花園～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ島津涼子～

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密の花園〜美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ 島津涼子〜

【コード】

N5074BA

【作者名】

かとう みき

【あらすじ】

司書室に籠るのは司書では無く読書好きの一生徒。彼女は恋愛相談室と呼ばれて、一部の信者に拜まれていたが、失恋してヤケで婚約する様な女だった。実は相談に来るのは変態に悩む女性ばかりだったが、耳年増なだけに彼女の助言は何故か心に響く不思議な説得力を持つ。情報通で普通の言葉も有り難く聞こえる才能を持つ「だけ」の、実は凄く平凡な少女だが、買い被られてばかりの半引きこもり。

サイドストーリーからUPしたり変な進め方してます。文章も暫くは大雑把かもです。

資料館の主 失恋と理解者1

特に約束がある訳ではない。

しかし彼女は常にそこに居るから、気紛れに訪ねても問題は無かった。

問題が有るとするなら、ある種の来客がある時だが、その時には司書室を訪ねない分別が弥也子にはある。

お客様がいらっしやるようなら読書でもしようかしら。

そんな事を思いつつ、少女は資料館に足を向けた。

天気が良いからと丘に登る事が許されるのは、弥也子の成績と素行に問題が無いからだ。

授業をサボるのは素行に問題が無いのかと、ヶ峰に馴染まない者は不思議に感じるだろう。問題は無い。怠業では無く、単なる選択でしか無いからだ。

ヶ峰では成績が学年で30位内ならば出欠が自由になる。素行に問題があれば取り消される事もあると話だが、そんな問題を起こした生徒は未だ曾て居ない。

その点では、兄弟校の春ヶ峰に共通し、風ヶ泉とは一線を画する。名門と呼ばれ乍ら、三校の内では風泉のみが奔放な校風で唯一の共学でもある。良家の子女を通わせるには躊躇する学園だった。

弥也子はこの学園では紛う方なき優等生で、常にトップの成績を保った。中等部からは風紀的にヶ峰を選択し進学したが、此処でも当然の如く優等生でトップを保ち続けた。

海島省悟などのライバルが不在なだけ、此方の学園でトップを取る方が楽でもあった。

弥也子自身は、当たり前前にノンビリと過ごしている積もりでさえある。

時に自宅で自己学習をし、時に所属するクラスの授業に出席し、時に資料館の主と呼ばれる少女に会いに行く。

そこに同行者があるのも、珍しい事では無かった。ただ、一人の友人に限って……ではあったが。

「弥也子さま。」

声で誰かは知れる。呼び掛ける声に弥也子が振り返れば、幼馴染みの少女だった。

弥也子を見つければ、いつも嬉しそうに笑う少女である。

そんな相手は珍しくも無いが、彼女は弥也子が珍しく自分から構う少女でもあった。

それはこれから向かう資料館に居る少女にも云える事だった。

「ご機嫌よう、恵美さま。」

「ご機嫌よう、弥也子さま。」

二人はニツコリと笑みを交わした。すぐに恵美が頬を染める。

恵美は別に女性を恋愛対象にする少女では無いが、弥也子に対しては一方ならぬ傾倒を示した。

「資料館に行くのですか？一緒にしても良いですか？」

「ええ。お誘いしようかと思ってましたの。」

恵美の話し方は敬語が苦手な彼女らしい丁寧語だ。それでも弥也

子に対しては懸命に敬語を交えようとする。

弥也子は微笑ましく恵美を見つめた。

「この前、弥也子さまに教えて戴いたクッキーを焼いてみたんです。召し上がってくださいますか？」

「あら、楽しみですわね。今度は消し炭にせずに済みまして？」

「まあ非道い。そんなの一回だけですもの。」

揶揄する眸が悪戯っぽく煌めけば、それにさえ見惚れて恵美の反論には力が籠らない。

頬を染めて弥也子を見つめる様は羞恥を含み、可憐な少女でしか無かった。

「では例の方も、今度は消し炭を口に詰め込まれずに済んで倅いでしたわね。」

「いやだ。弥也子さまったら。」

いや、倅いと思う普通の感性の持ち主ならば、恵美を主とは仰ぐまい。

弥也子は思い至り、訂正した。

「いえ、寧ろそれが不幸でいらっしやるのかしら？」

「……………弥也子さま。」

呟いた弥也子に、恵美は複雑そうに呼び掛けた。

「奴隷に敬語など不要です。弥也子さま。あの方なんて呼ぶ必要も無いですよ。」

「他家の使用人には、ある程度の敬意を示すものでしてよ？恵美さま。」

それはその家への敬意となる。
恵美は笑った。

「アレは奴隷ですもの。」

13才の少女の云う台詞では無かった。
何故か同類と見做されているが、断じてその嗜好を持たない弥也子は、そつと嘆息した。

「奴隷の存在など認めませんわ。」

恵美は可愛い友人だが、その趣味嗜好に共感する事は一生無いと弥也子は思っている。

資料館の主 失恋と理解者2

司書実に印が無いのを確かめて、弥也子は扉を叩こうとした。

「弥也子さまあ！」

叩く前に扉は開き、いつもポーカーフェイスに微笑む少女が弥也子に抱き付いた。

「まあ、涼子さま。」

弥也子が何を云うよりも先に、恵美が心配そうな声を上げ、涼子を引き離した。

「どつなさったんですの？」

弥也子は生温い眼差しで恵美を見守った。

妬くのね。涼子さまにも。

こんな時だけはキッチンとした言葉を遣える友人が、弥也子には不思議でならない。

鍵をかけて、何故こんなに立派な応接セットが司書室にあるのか首を傾げるソファアに恵美と涼子が並んで座る。

勝手知ったる司書室の簡易キッチンで、弥也子は紅茶を淹れた。家事は弥也子が覚えるべき仕事では無いが、ケーキやクッキーなどのお菓子だけは作れる。

同じく、お茶も完璧な美味しさで淹れる。

これは淑女としての趣味に相応しいから、殆ど義務として覚えた事だった。

お茶の葉を蒸らす間にカップを温め、恵美が持参したクッキーも皿に盛った。

「ご飯も炊けない娘とは思えない手際である。」

料理までは手を出さなかったが、弥也子はその気になれば完璧なデイナーさえ作れる様になるだろう。

しかし弥也子はその必要を認めず、簡単な朝食すら作った事は無い。

お菓子作りもある程度のレパートリーを身に付けた後は、気紛れに復習を思い立った時以外で、キッチンに立つことは無かった。

必要になれば作れない事も無いだろうが、そんな必要があるとも思わないから、興味すら抱かない弥也子である。

美味しいお茶を淹れるのは嗜みと考える故に、完璧に熟す弥也子であるから、女性らしい趣味に「必要」以外で興味を持つ事は無かった。

お茶を飲んで、落ち着いた涼子は語った。

曰く、恋をしている。

曰く、年上の男性で。

曰く、彼には恋人が居る。

「つまり失恋なさったのね？」

弥也子はあると告げ、涼子はまた泣いた。

恵美が涼子の肩を抱いて慰めた。

「もう良い。誰でも良い。今日迎えに来た人とホテルでも何でも行つてやる！」

「何故いきなりホテル？その前に婚約じゃないの？」

恵美が微妙な常識発言をした。

弥也子も一応は同意見だった。しかし恵美の奔放さを、処女なら許されると云うものではないと思う弥也子は、その彼女と意見を同じくする事に抵抗を感じた。

「……………」

故に弥也子は、無言でカップを傾けた。

「何を云うの！？試さないと怖いじゃない！！」

「……………試すって。」

「変態だったらどうするのよ！？」

恵美と弥也子は顔を見合わせた。

そう云えば、涼子の元に相談に来る女性達の配偶者は、特殊な性癖持ちが多い。

年齢的な問題で、滅多に社交の場に身を置く事は無いが、少ない機会でも逃さず観察していた二人である。

恵美はその本能で、弥也子は努力と才能で、その性癖を見抜いた相手は少くない。

「そもそも処女の癖に、何でそんな恋愛相談受けてるの？」
「恵美さま……。同感ではございませんけど。」

もはや言葉を取り繕わない恵美に、弥也子はため息を零した。

「恵美さま！」

「うん？」

「弥也子さま！」

「はい。」

感極まった様子で、涼子は叫んだ。

「嬉しい！！！」

失恋を忘れ、涼子はサメザメと嬉し泣きした。

恋愛相談室と呼ばれ、様々なセックス相談を持ち込まれ、経験豊
富と云われ続けた涼子は嬉しかった。

「私が処女だって信じて下さるのね！？」

信じた訳ではない。

二人の少女は、ただ知っているだけだった。

涼子は別に、いつも「あんな」に愉快的な人間では無い。

今後、更に親しくなつてからも、あそこまで壊れた涼子を二人が観る事は二度と無かった。

翌日、涼子は珍しく授業に出て来た。

が、弥也子と恵美を呼びに来ただけらしく、二人が揃えばすぐに教室を後にした。

「誰かに言付けて下されば宜しかったのに。」

三時限目に登校した弥也子が恐縮して見せれば、涼子はとんでもないと首を振った。

「私の都合でお呼び立てするのですもの。そんな無礼な事は出来ませんわ。」

後にその無礼な事をする涼子も、この時は殊勝だった。

そして、後にも先にも無い程の、己が無様な真似を涼子は詫びた。

「みつともない姿をお見せしまして。」

羞恥に俯き、涼子は云った。

「忘れて下されば倅いなのですけど。」

弥也子は微笑した。

潔く謝罪出来る人間を弥也子は好ましいと思う。

恵美は恵美で涼子が好きだから、と深く考えずに頷いた。

「涼子さまが云うなら。」

「私は誰にも申しませんし、恵美さまはすぐに忘れてしまわれませ
わ。」

弥也子の言葉に引つ掛かりつつも、恵美は頷いた。

「うん？」

「……………。有難うございます。」

まさか本当に忘れるとは思わず、涼子は頭を下げたものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074ba/>

秘密の花園～美晴ヶ峰のお嬢様シリーズ島津涼子～

2012年1月14日01時12分発行